

新たな生活行動と豊かな富裕層の登場

(株) 需要開発研究所
代表 野邊 牧

はじめに

私どもが仕事をしてきた産業・業種は、食品や飲料・酒類、化粧品、家電、病院・流通業・飲食業などの消費財産業から、情報・通信機器、半導体・電子部品、医療機器、広告業といった生産財産業、国や自治体などの公共機関まで、実に多岐にわたる。日本の企業もあれば米国などの海外の企業もある。

その雑多な経験のせいで、私には仕事を通じて遭遇する事象（企業・組織、業務、人・言動など）を「アナログ的（ア式・模倣式）」か「デジタル的（デ式・索性式）」かで、はっきり二元に分けてとらえる習慣がある。私の乱暴な文化人類学的な考察によれば、ア式業種は「消費財産業」に多く、デ式業種は「生産財産業」に多い。日本人とア式企業には、湿った情動型のア式人が多く、アメリカ人とデ式企業には、乾いた理動的なデ式人が多い。メシを食ったり酒を飲んだりする時は、文化人的なア式人が面白いが、仕事の相手としては定量・定性と技術から発想する文明的なデ式の方がうまくいく。ア式人は苦手である。

デジタル時代に突入して、あっという間に家庭も企業もデ式化が進み、私たちが日々利用する用具・備品も機器・設備もサービスも、すべて高性能で便利で合理的で快適なデ式モデルに変わり、生活行動は完全に一変した。新聞や雑誌、大型専門店の店頭には、日々新しい製品や仕組みが誕生し、想像もしなかったような新世代型の高度な技術製品が次々と登場し、一方には新たな仕掛けや仕組み（ビジネスモデル＝業型）の進出が続く。後者の業型開発は、私たちにとても最大の事業課題となっている。

デ式企業との仕事で出会う経営者や幹部には、未曾有の先端的ななにかを生み出すことを仕事と考えている人が多い。行動を変えるもの、新たな行動を生み出すものを創り出し、誰も試みなかった方式を提供して画期的な成功を収め、自分の見識の正しかったことを証明しようという構想に燃えている人物もいる。

これに較べると、ア式企業人には、今日を昨日の延長として生きている人が多く、商品開発についても、よそをまねたり似たようなものを品揃えしたり、精々目先を変えたり手直しする程度の改良・改善を重ねるのが関の山。新世代だの画期的だの未曾有だのといったドカイ構想には余りお目にかからない。

ところで今年の本誌新年号は「変革の時代をどう読むか」が特集の主題となっている。意識を変えろの、新しいものに挑戦せよと説教しても意味がないから、私どもが馴染んできたデ式産業の仕事の発想を用いて、デ式人が物を観察し、技術を解析し、行動に注目し、問題を発見し、あるがままに事実を把握し、そこから新しい行動様式を作り出そうとする思考回路を提示してみようと思う。陳腐な常識や見識や知識の範囲で変化を歪曲し矮小化する“ア式（悪しき）”思考方式を捨て、いま生きている人たちの生活目的、生活欲求、生活資源、生活行動を、需要と商品に翻訳するための思考基盤を設計し直す手掛かりになれば幸いである。

1. 新生活人類の登場

● 伝統的な属性概念の崩壊

生活者・消費者の人物像や特性を定性的に把握したり、あるいは体系的に類別したりする場合に、その基準として利用されるのが「属性」という枠組みである。右欄に示すような「性別」「年齢」「学歴」「職業」などが代表的なものである。

消費者調査などのように、不特定多数の人々の動向を探ろうとする場合に、これらの属性項目ごとの情報が、全体的な傾向や構成集団ごとの特異傾向を把握する有効な決め手として使われる。

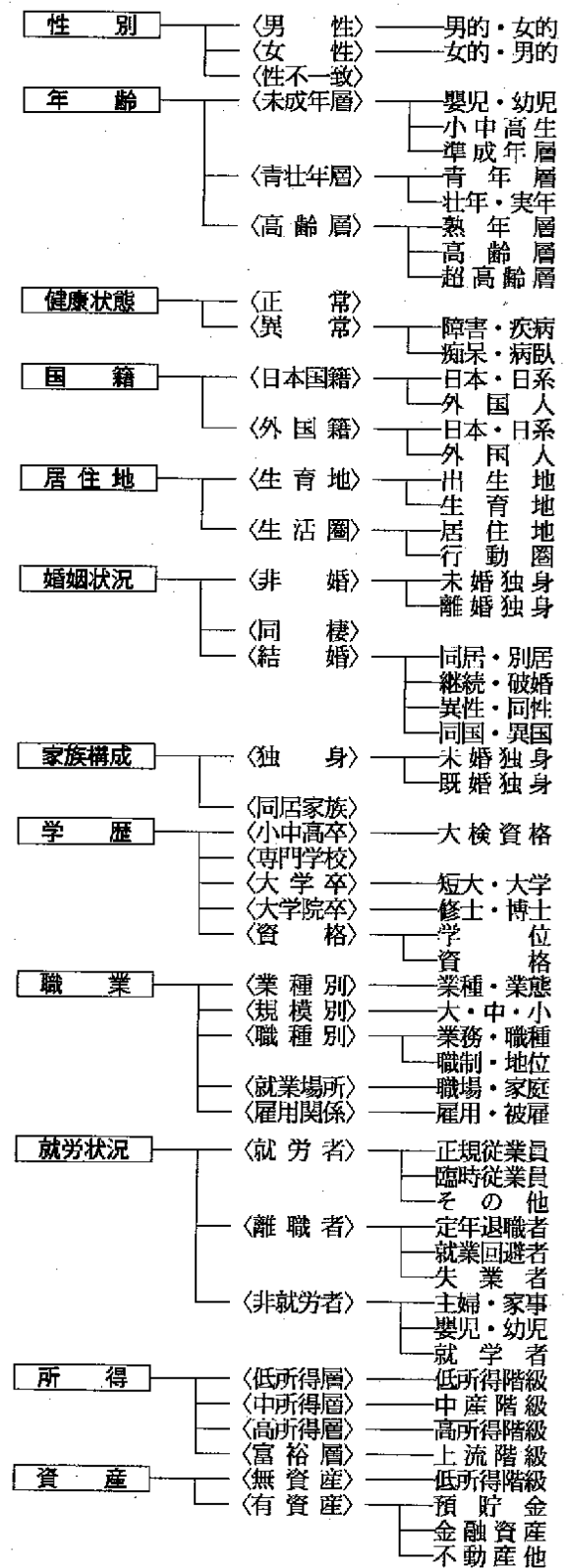
そこで、生活行動や生活需要がどのように変化しつつあるかを分かりやすく説明するために、まずはわれわれにもっとも馴染みの深い「属性」を借りて実像を絵解きして見ることにする。

これまで私たちが想定してきた日本の生活者像は、この伝統的な「属性」という枠組みにスッポリと収まり、全体と個別集団の動向は容易に説明がついてきた。ところが、この「属性」の中に、従来とは異なる生活行動を示す人々が登場し始めたのである。旧来の属性基準で集団の性向を説明することが難しくなりつつある。

標準世帯、9割中流などと十把一からげに捕捉されてきた“平均的生活者像”の埒外に、これまで存在しなかった別種の生活者が増殖し始めたために、全体を“不特定多数”の大集団として類別するのに都合のよかった伝統的な「属性」の枠組み自体が陳腐化しつつある。全体を属性や平均でとらえる枠組みに代わって、集団を“特定少数”に細分化し、個々の集団として認識し得る別の公式を探る必要に迫られているのである。

従って企業が、平均世帯、平均年齢、職業別・所得別という雑な市場領域を設定して、その全需要を賄いうる“全天候型商品”を大量・低廉に製造・販売して大稼ぎしてきた単純な図式も限界にきている。企業の思考を支配している惰性的な消費者観は、生活行動の実態から大きく乖離しているはずである。以下に示す着眼点を参考に、現代人の実像を解明し直すことを勧めたい。

表1. 生活者の「属性」基準と構成



● 新種の生活人類の登場

では、実際にどのような生活者・消費者が登場してくるかを、具体的に考察してみよう。右の表2は、前頁に掲げた属性の各項目ごとに、現在から将来にわたって起こりつつある変化を略述したものである。詳細は表の文面をお読み頂くとして、以下に顕著な事例を順番に挙げてみる。

まず第一が、「年齢」上の構造変化である。長寿化と少子化が進み、人口構成は大きく変わる。しかし、60代から70代前半までの高齢世代は、10昔の老人とは違って現役同様の体力・知力・資力をもっており、生産・消費の第一線で活躍し続ける人口が増えるという側面も見逃せない。

第二に注目されるのは、「職業」「就労状況」の変化である。伝統的な業種区分や職種分類が崩壊し、有資格の職種や高度な専門職がもてはやされることになり、一般職との間に大きな身分差と所得格差を生じることになる。当然「学歴」が重要な要因となるから、高学歴化が促され、資格や学位が重視される社会になるだろう。

第三に注目される変化は、職業や就労状況、起業・創業・投資の成功、遺産相続などによって、人々の得る「所得」「資産」に大きな格差が生じることである。やがて日本にも、欧米のような高所得・高資産をもった富裕階層が登場するだろう。

この他、表2に示されるところを拾い出すだけでも、伝統的な性意識や性行動が崩壊し、婚姻関係、出生形態、家族構成も多様化し、大都市に人口が集中して、多国籍化が進み、不健康や疾病に悩む人々が増えてくることは間違いない。

なお属性上の変化とは別に、行政と官僚の腐敗が原因で国の赤字が増え、国民の社会負担の重さが生活を圧迫する事態は避けられないだろう。

これらの変化は、いま既に進行・拡大しつつあり、10年をまたずに極めて身近な現象となるに違いない。こうした変化が、これまでとは異なった生活意識と生活行動を示し、異次元の生活需要をもった異人種を生み出す要因となる。

彼らが、われわれのような不特定多数の均一の母集団ではなく、細分化された特定少数の個別集団を形成しているところが大きな違いである。

表2. 属性別に見た生活者の変化

属性別	新 た な 動 向
性 別	外観・性徴・容貌・服装などの伝統的な男女の差異が希薄になる。性不一致症や性的疾患に悩む人、同性愛・性倒錯に陥る人も表面化し、性を巡る論議が活発になる。
年 齢	高齢世代が急速に増える一方で、若年層の人口比率が減少し、人口構造が大きく変わる。高い能力や体力を持った高齢者が増え、さらに5年間は現役期間が伸びるだろう。
健 康	生活習慣病や現代病、難病に苦しむ人、また精神的な異常や引きこもり症を呈する人が増える。高齢化により認知症や要介護の寝たきりの人はさらに増加する傾向にある。
国 籍	経済・文化の国際化、国内の労働力不足などにより、日本で暮らす外国人が増え、多国籍化が進む。一方で海外で留学・就労し、外国人と結婚する日本人が飛躍的に増大。
居 住 地	産業・情報と人口の都市圏集中が進み、都市と地方の生活者の格差が拡大し、大都市圏に新しい生活行動が広がる。海外で暮らす日本人はますます多くなる。
婚姻状況	不婚・遅婚が進み、未婚者が増える。また法律婚に縛られない婚姻形態（同棲・同性間婚姻）が多くなる一方、離婚は増大し、別居夫婦や再婚同士の夫婦も増えよう。
家族構成	不婚・遅婚、非就労・高学歴化、離婚・死別などによる独身者が増え、とくに高齢者の単独世帯が多くなる。一人っ子世帯、母（父）子世帯の急増は避けられない。
出 生	子供が結婚した実父母から生まれる以外に、非婚出産、体外受精、代理母といった多様な出生形態が増える。クローンも議論され、また欧米並みに養子縁組も多くなるだろう。
学 歴	最適の就職や資格取得を目的とした専門教育が重視され、大学院での学位（修士・博士）や社会的な資格の取得者が多くなる。社会人の進学や生涯教育の受講者も急増。
職 業	伝統的な産業・業種分類は消滅し、情報・技術・サービスや、有資格の専門職種が意味をもつようになる。また経営・管理が被管理などの職能も重視されるだろう。
就労状況	終身雇用以外の時間・期間雇用、派遣など雇用形態が多様化し、転職、解雇・失業が頻繁に発生。ニートやフリーターなど非就労・不定就労者、一方働く高齢者も増大。
所 得	所得格差が広がるにつれ、貧富の差が拡大する。標準所得を上回る高所得層の上に、米国型の富裕層（上流階級）も登場し、新しい生活行動と富裕需要が顕著になる。
資 産	現金以外の預貯金や証券、自家用の持ち家や不動産資産、投資用の資産を保有する階層は既に多数いるが、さらに遺産相続による富の集中が進み、資産家階級が確立する。

2. 生活資源の多元化

● 生活資源概念の導入

前述のような新しい生活者の登場は、社会や経済の変化、技術や情報の進化と言った外生的な要因によってもたらされるだけでなく、生活者の欲求や価値観の変化と言った内生的な要因によるところが極めて大きい。そこでこの章では、生活者側における本質的な因子として「生活資源」に注目し、その動きを説明することにする。

企業が「ヒト・カネ・モノ」といった「経営資源」によって運営されるように、生活もまた固有の「生活資源」によって維持される。生活に必要な資源とは、企業と同様に、生活を支え、動かしていく動力（エネルギー）と考えればよい。

これについての議論や定説はないので、私の説を紹介するしかないのだが、右の表3に示される「欲求・資金・時間・体力・場所・手段・情報・人脈」の8種類の動力源が、私の考える「生活資源」である。実際のご自身の生活行動を想像しながら、家族の生活を維持し、その内容や水準を左右している要因をお考えになれば、ここに掲げたエネルギー源が、あなたにとっての「生活資源」であることが理解できるであろう。

おそらく大半の人は、「生活資源」とはカネだと答えるだろうが、カネが幾らあっても体力や健康で劣り、時間に余裕がなく、手段や設備、情報や知識が足りず、土台となる空間や場所は乏しい、人間関係も弱いとなれば、生活は成り立たないし、豊かな生活などとても望むことはできない。

いわゆる生活水準とは、これらの「生活資源」の保有量とその適正な組み合わせによって成り立つものであるから、どれか一つの資源だけを大量に保有してみても、他の資源が不足していれば、生活はいびつで片寄ったものになり、量・質の均衡を失った貧弱で低水準の生活に陥ることになる。

生活水準の向上、生活の質の充実と高度化を理解するためには、カネ本位の生活概念から脱却して、ここに掲げるような統合的な「生活資源」の視点から生活を見ることが不可欠となる。

表3. 生活資源体系と構成因子

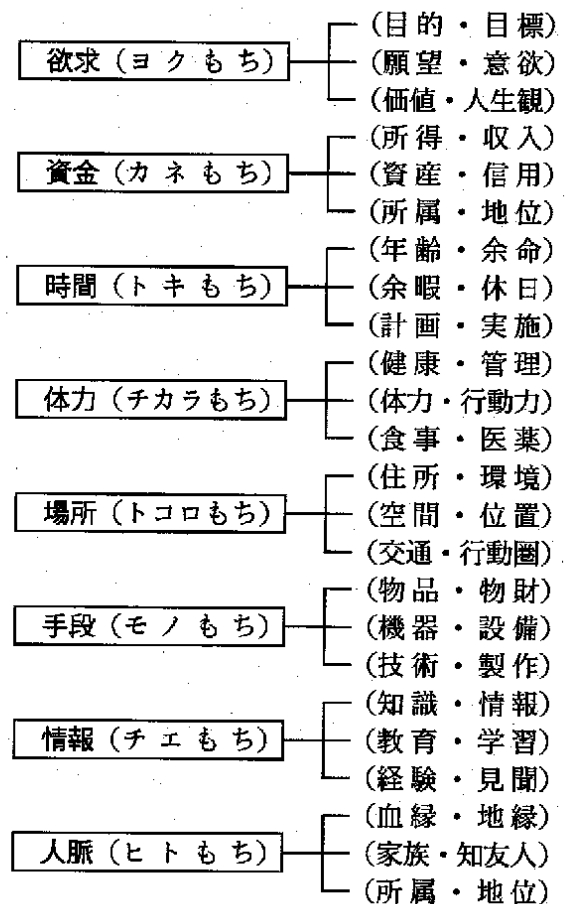


表4. 生活資源の拘束度と自由度

$$\boxed{\text{総資源量}} = \boxed{\text{拘束資源量}} + \boxed{\text{自由資源量}}$$

資源拘束要因 :

生命行動；睡眠・食事・医療
生活行動；家事・管理・教育
職業行動；通勤・勤務・学習
社会行動；義務・関係・協力

$$\boxed{\text{自由資源量}} = \boxed{\text{総資源量}} - \boxed{\text{拘束資源量}}$$

$$= \boxed{\text{所与資源量}} + \boxed{\text{創出資源量}}$$

$$\boxed{\text{資源拘束度}} = \boxed{\text{拘束資源量}} \div \boxed{\text{総資源量}}$$

$$\boxed{\text{資源自由度}} = \boxed{\text{自由資源量}} \div \boxed{\text{総資源量}}$$

$$\boxed{\text{資源富裕度}} = \boxed{\text{自由資源量}} \div \boxed{\text{拘束資源量}} \geq 1$$

● 資源保有量の増大

私たちの生活は、大ざっぱに分けると、それを停止・放棄すると生活や生命が維持できなくなるために、必ず遂行せざるを得ない必須の営み（拘束的生活領域）と、実行するしないが自分の選択と裁量に委ねられる自由な営み（選択的生活領域）とから成り立っている。

前者には、前頁の表4の中央に列举されるような「生命維持行動；睡眠・食事・疾病治療」「生活運営行動；家事・管理・学校教育」「職業行動；勤務・交際・学習活動」「社会行動；義務・関係維持・協力活動」などの四つの領域がある。

これらは生物として、また生活者・職業人・社会人として選択の余地のない生活行動であるから、資金や時間などの「生活資源」は、まずは「拘束的生活領域」を維持するために投入される。

こうした拘束的な生活領域は、保有する資源量が乏しければ生活維持が不可能となり、困窮に追い込まれる。逆に十分な資源量を保有していれば、「拘束的生活領域」を十分に賄った上に、余剰を「選択的生活領域」に投入することができる。

かつて生活水準の高低は、生活費という「資金資源」を軸に、生活費に占める食費の比率（エンゲル係数）によって評価されていたが、表4に現代的な「エンゲル係数」と、より積極的で肯定的な「富裕度係数」を示す指標として、「総資源量」「資源拘束度」「資源自由度」といった公式を掲げてみた。生活水準を下記のような内容で評価しようとするものである。

- a. 二つの生活領域に投入できる資源量は、生活者が保有する資源量によって決まってくる
 - b. 保有資源が「拘束的生活領域」にどの程度縛られるか（資源拘束度）が生活水準を示す（エンゲル係数）
 - c. 保有資源が「選択的生活領域」にどの程度投入できるか（資源自由度）が生活水準の高さと余裕を示す

現代人が生活に必要な資源をどの程度保有し、どの程度の余裕をもっているかを把握することは、需要動向を知る新たな決め手となるはずである。

● 生活資源の富裕階層

1章で示したような、これまでとは異なる生活意識と生活様式をもった新生活人類の登場を促した第一の要因は、多様な生活資源を豊富に保有する生活者が増大したことにある。

これまでの資金資源が中心の時代には、私たちは富裕者を「金持ち」と呼んできた。だが現代は、金だけでは持てないものが増えており、金があっても豊かな生活が送れるとは限らない。例えば健康や寿命、時間や行動圏、知能と情報、良好な人間関係は金では買えないからだ。金が乏しくても、強靱な体力と長寿、余暇と広域の行動能力、高い知能と豊富な知識、善良な知友人に恵まれていれば、充実した生活を送ることはできるのである。

豊かで高度な生活を送るには、カネ（資金）持ちであるだけでなく、トキ（時間）・チカラ（体力）・トコロ（場所）・モノ（手段）・チエ（情報）・ヒト（人脈）の全ての資源（モト）を必要水準以上に、かつ最適な組み合わせで保有している（モトもち）ことが不可欠となる。

次に新生活人類を生み出したもう一つの要因を挙げておく。それは人々の資源の保有量が増大した結果、拘束的な生活需要を十分に満たした上に、それを選択的な生活分野に回せるだけの余裕を持つに至ったという状況である

労働時間の短縮と長寿はトキもちを、医療と健康の向上はチカラもちを、自宅・別荘の保有や交通手段の拡充はトコロもちを、高度な生活財や機器・設備の開発はモノもちを、高学歴化・情報化はチエもちを、学校や職場、地域やNPOなどの社会活動はヒトもちを生み出した。身近かに富裕者（モトもち）を見つけることは難しくない。

現代の生活者の需要は、カネ・トキ・チカラ・トコロ・モノ・チエ・ヒトを持ちたい、増やしたいという欲求とともに、このようなモトを投入・消費すべき対象と機会を求めて動きつつある。

多様な欲望商品や資金商品は、欲求需要や資金需要に対応して生まれたものである。通信・情報、サービス・金融の分野では、新次元の需要を満たす金融・物品・設備・情報・技術・役務・空間関連の新世代商品が次々と開発されつつある。

3. 生活目的と生活領域の広域化

● 現代人の生活領域と生活目的

人々の手元に集積された生活資源が、実際にどこに投入されるかを理解するには、現代人の生活目的を理解しなくてはならない。

一般に生活を構成する領域と言えば、衣食住と答えるのがこれまでの定説であった。ただ近年は、それ以外の娯楽・交際・教育などの比重が高まってきたので、これらを加えることもある。しかし、このような体系は、過去の家政学や家計簿から生まれた旧時代的な考え方であるから、これで現代人の生活領域を捕捉することはできない。

だが、これに代わる現代的な生活領域の公式がある訳ではないので、私たちが長年にわたって生活目的を解明したり、家庭の消費行動や需要動向を調査研究したりする場合に使用してきた「生活領域体系」（次頁表6）によって、人々の生活の動向を考察してみることにする。

ここでは、生活は「生命の維持（＝肉体維持・肉体保護）」の2領域から、「生命の継承」「拠点の確保」「存在の伝達」「関係の維持」「文化の創造」「生活の安定」に至る8つの領域で構成されている。表現に馴染みがなく、意味が分かりにくいだろうが、各領域を構成する細部の項目を見て内容を理解して頂こう。

なおこの生活領域は、実は右下の表5に示されるように、「生物的な本能」に起因する「本能的な生活目的」と、「人間的な欲求」から生まれてくる「人間的な生活目的」を、体系の土台に置いて設定されている。われわれの生活は、本能から派生した「個体の維持」「集団の維持」「秩序の維持」という二次的な目的を達成するための6つの生活領域と、人間的な欲求を満たすための2つの生活領域から成り立っているのである。

前者の本能の要請をみたすための6領域が、生命と生活を維持するのに絶対不可欠な生活領域、後者の人間的欲求を満たすための2領域が、選択的な高度な生活領域ということになる。

● 高度な生活領域の広がり

「本能的な生活目的」は、絶対に実現しなければならない要請であるから、人々の生活資源はまずはこの領域に投入される。その目的が量的に満たされると、次はそれを質的・機能的に高めようとする欲求をもつようになるから、生活資源の余剰分はそこに振り分けられる。

一方「人間的な生活目的」は、選択的な目的であるから、前者の目的が実現された後に生まれる高度なものと考えられる。生活資源を豊富にもつ富裕者は、本能的な生活領域を質的・機能的に高めつつ、より次元の高い人間的な生活領域にその資源を投入するようになる、これが、表5と表6の2つの体系に託した私の仮説である。

現実の一部の生活者は、十分な余剰資源を投入して「肉体の維持」や「肉体の保護」から、「拠点の確保」「関係の維持」までの各項目にわたって高い水準の生活を実現しており、いまや彼らの関心は、人間的な「文化の創造」「生活の安定」という生活領域において、豊かで文化的な生活次元を構築するところに向けられつつある。

そこには、衣食住雑という生活概念ではとらえることのできない、新たな生活領域が広がりつつある。先例のない、模索と試行錯誤の生活次元である。単なる理屈だと思わずに、あなた自身の生活や身近な富裕者の生活を、上の論理で分析して見れば、納得のいくところがあるはずである。

表5. 現代人の生活目的と生活領域

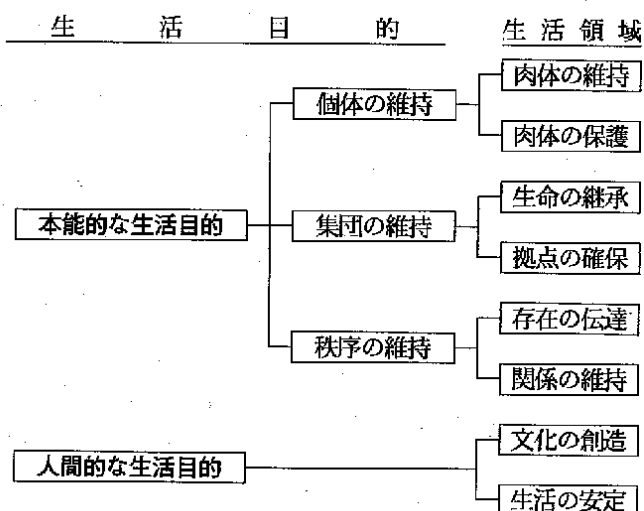
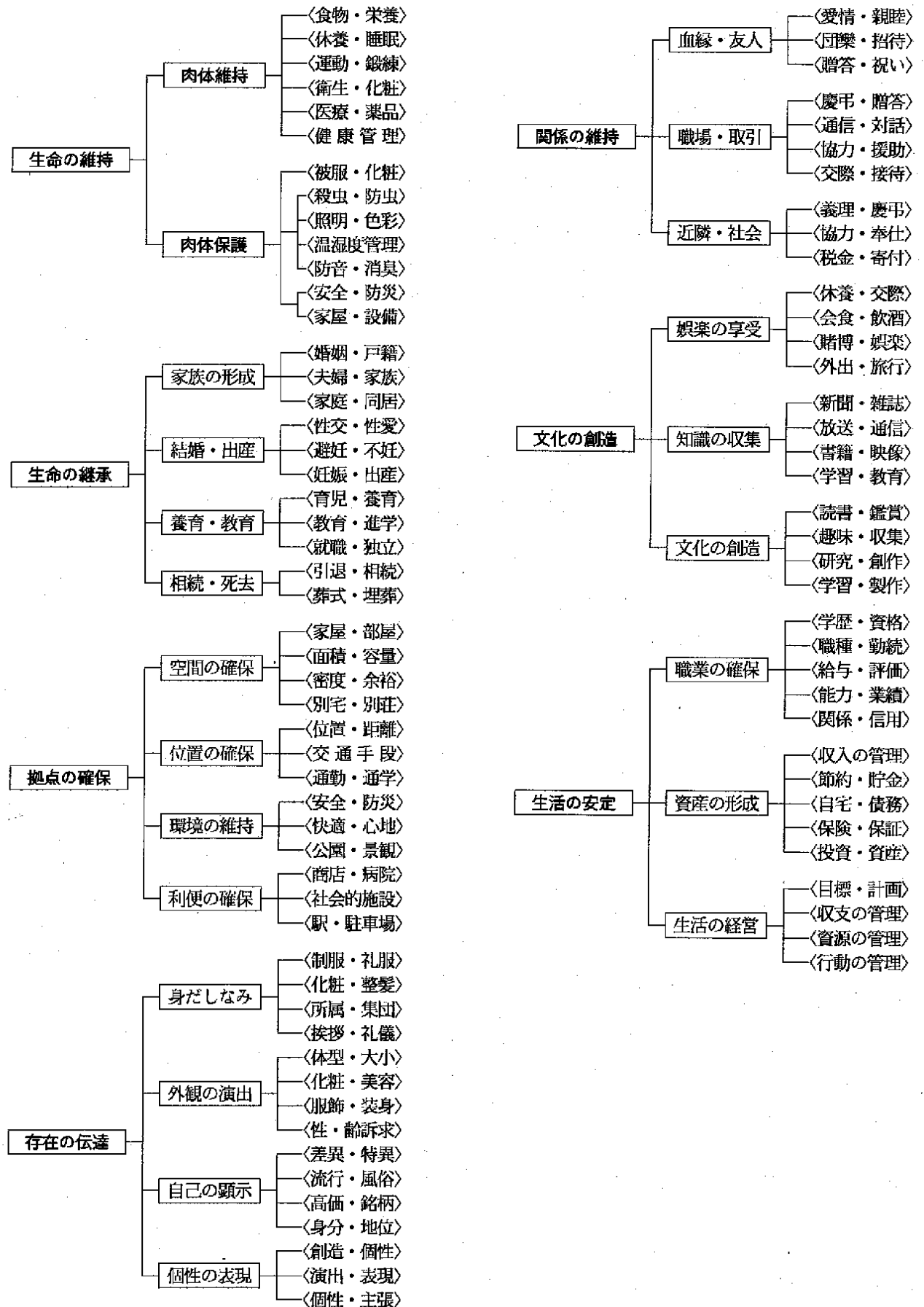


表6. 現代人の生活領域と生活行動体系



4. 欲求と生活次元の進化

● 欲求発展への新たな視座

現代人の需要動向を明確に理解するには、これまでの「生活資源」と「生活目的・生活領域」という二つの視点の他に、「欲求の進化」「生活次元」と言う見方をもっておく必要がある。

人間の欲求については、米国の心理学者マズロー (A. H. Maslow) の「欲求発展段階説」が有名である。人の欲求は「生理的欲求」から「安定の欲求」「所属の欲求」「尊厳性への欲求」へと進化し、最後に「自己実現への欲求」で完結するという学説である(次頁図1参照)。

彼の論理は、人々が願望する生活状態や世俗的な身分などをモノサシ代わりに使って、欲望の変化を平易な図式によってアナログ的に解説しただけに過ぎない。そこには人々の「生活次元」や生活行動の「動機」への考察がなく、また「欲求」の原義の解明が欠落しているために、「欲求」の変化がどのような需要を生み出すかといった問題を解き明かす決め手にはなり得ない。

そこで、人々の「生活次元」と「欲求の段階」を使って、これに代わる「欲求進化の論理回路」を設計してみた(次頁表7・図2参照)。表・左に人々の「生活次元」と、それを実現しようとする「欲求」の進化段階が示されている。「生活次元」には、「本能の要請の遂行」「生活手段の量的な確保」「生活手段の質的な確保」「生活手段の高度化」「生活手段の快適化」と、「富裕度水準の顕示」「主体的欲求の実現」「独立と自由の獲得」の8段階が掲げられている。

また図7は、横軸にこの「生活次元」の発展段階を、そして縦軸にこの変化が生み出す「飢餓の克服」から、「自由の実現」に至る8段階の「欲求」の動きを取り、この二つの因子に基づいて欲求の進化過程を曲線で図示してある。

生物的な人類が、本能の要請を満たすことによって、やっと本能の拘束から解放され、初めて自己目的的な「欲求(動機)」をもつ人間的な人類へと進化を果たす。これが私の描く筋書きである。

● 欲求の進化と富裕者の登場

少し言葉の説明をしておこう。前項で言う「生活手段」とは、端的には物品や用具のことであるが、広義には前述の「資金・体力・時間・場所・手段・情報・人脈」と考えて頂くとよい。

次に生活手段の“質”とは、品質・機能の意味、“高度化”とは安全性や環境対応力、完成度や統合機能、あるいは先端性や世代性の高さのことである。“快適性”とは、五感(視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚)にととの心地や風合いの良さを表すが、現代の生活用品、機器設備、施設、サービスの価値を左右するのは、感覚的な要因であり、人々の生活行動や欲求を解明するには、物質の外にあるこの価値基準に注目する必要がある。

ところでわれわれの行動の動機には、ものや質を確保することを目的にするだけではなく、自分の保有する身体的な優位性、富や成功、地位・身分を他に誇示しようとする意図もある。これが富裕水準の顕示という生活次元である。マズローの言う尊厳性への欲求がこれに当たるだろう。

人々が、このような物質的ないしは世俗的な目的を達成すると、その欲求は自分らしさを創造し主張したり、あるいは完全に自由の境地を模索する段階に向かう。マズローの言う自己実現である。

先進国の生活者は、既に本能の要請を満たすのが精一杯という生物的な生活段階を抜け出し、また生活手段(=資材・生活資源)の量的・質的確保を図るという段階も既に通過して、手段の高度化と快適化を指向する次元に到達している。

一部の富裕者は保有する手段や生活水準の高さを誇示・顕示したり、あるいはそのような物質的な段階から解放された特権階級は、個性的で創造的な生活段階を模索しているようにも思われる。

現代の日本人を、平均的な欲求をもった単純な不特定大多数と規定するのは間違いである。物量・品質・機能への物質的な欲求、快適性への感覚的な欲求、顕示効果への心理的な欲求(文明的欲求)と、創造と主張への精神的な欲求、自由と遊びへの無重力の欲求(文化的欲求)という異質の欲求をもった少数特定の多層的な集団から成るということを深く認識しておくことである。

図1. マズローの欲求発展段階モデル

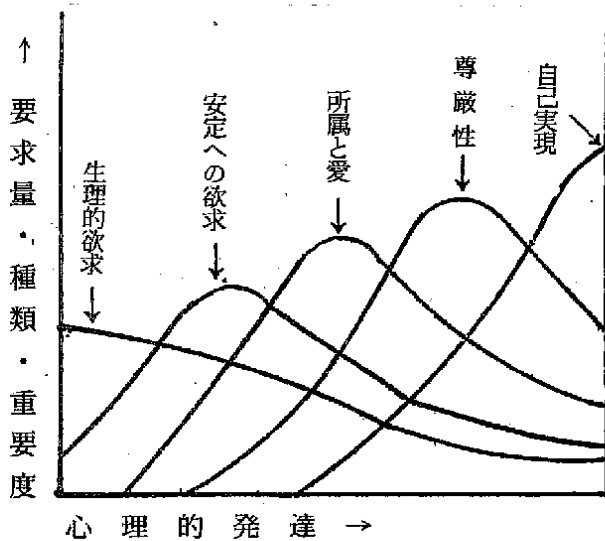
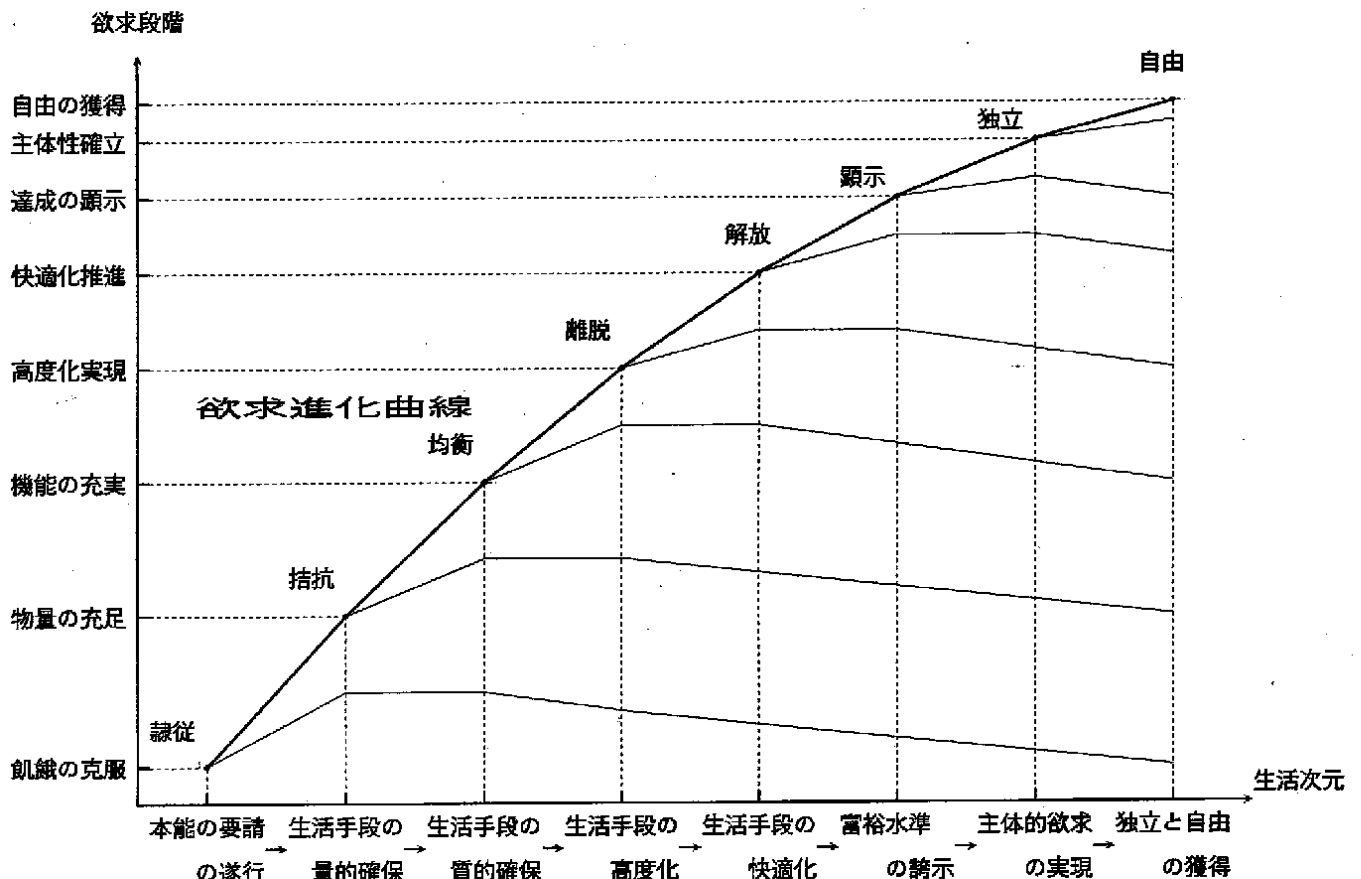


表7. 欲求の発展段階

生活次元	欲求の内容	力関係
本能の要請の遂行⇒飢餓の克服	生活手段の量的確保⇒物量の充足	隷従
生活手段の質的確保⇒機能の充実	生活手段の高度化⇒高度化実現	拮抗
生活手段の快適化⇒快適化推進	富裕度水準の誇示⇒達成の顯示	均衡
主体的欲求の実現⇒主体性確立	独立と自由の獲得⇒自由の実現	離脱
		解放
		顯示
		獨立
		自由

*「力関係」；「欲求」と「本能」との力関係を示す

図2. 生活次元の向上と欲求の進化の過程



注) 上図の横軸は、人々の生活水準が向上し、生活次元が生物学的な「本能の要請の遂行」から「独立と自由の実現」へと高度化していく段階を示す。一方縦軸は、上のような「生活次元」の向上にともなって、すべての行動の動機となる「欲求」が本能的な「飢餓の克服」から「物量の充足」「機能の充実」へと進化し、さらに「高度化の実現」「快適化の推進」を経て、最後に「自由の獲得」へと発展していく過程を示している。図の実線は、その「欲求」の発展段階を示しているが、同時に相克関係にある「欲求」と「本能」が上のような過程の中で力関係が逆転し、当初は「支配・隷従」の関係にあった両者が互いに「拮抗」「均衡」する状態を経て、「欲求」が「本能」の支配から「離脱」し「解放」されて、「独立」「自由」の境地に到達する動態も併記してある。

5. 富裕者の実像と生活行動

● 富裕な生活人類の実像

今日の日本に、豊かで異質な生活者が登場していることを明らかにしようと、1章では「属性」によって顕著な事例を紹介し、2章から3章にかけては、「生活資源」「生活領域」「生活欲求」という三つの視座から、その全容を立体的に究明しようとしてきた。

その分析を通して発見したのは、カネ・トキ・チカラ・トコロ・モノ・チエ・ヒトという多元的な動力を潤沢にもった人、旧来の生活領域と未来的な領域の両面にまたがって高い水準に到達している人、文明的欲求と文化的欲求に動かされて人間らしい高高度の生活次元に挑もうとしている人、即ち現代の富裕者の存在であった。

今日の富裕者とは、これまでのような単純なカネもちやモノもち、世俗的な偉い人や成功者ではなく、上に掲げるようなすべての条件を満たしている生活者のことである。資源と動力は豊富で、行動範囲は広域にまたがり、生活水準は高く、目的の実現には投資・支出を惜しまない人たちである。総需要と市場規模は膨大である。

と言ってもこれに該当する人を思いつかないだろうから、具体的な例を挙げて見よう。その一つは団塊の世代を含む高齢者である。彼らは、昔の習慣で高齢と呼ばれてはいるが、寿命・体力・気力の点では、若者とたいして変わらない人が多く、しかも預貯金と年金の合計可処分所得と、金融資産に不動産それに加入保険額を合算した総資産は、若年層や中年世代のそれを遥かに上回る。

しかも彼らは、大半が職業を離れた人たちだから、四六時中“専業消費者”をやっている、しかも毎日休みなく休んでいる“専業道楽者”である。乏しい給料や僅かな小遣いであくせく生活している専業主婦や若者など足元にも及ばない。

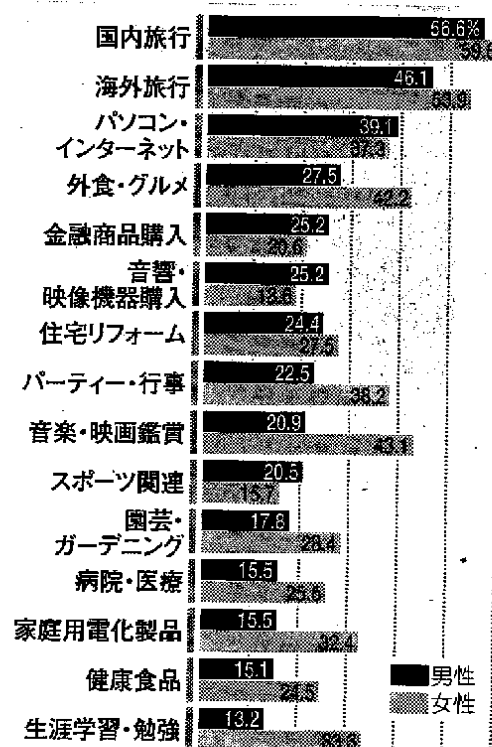
だからその需要を商品に置き換えることは容易ではない。文化も教養もない痩せた企業の、未熟な人生経験と貧乏暮らししか知らない人材には富裕者の生活を理解することは不可能だからだ。

● 富裕者のための富裕商品の開発

団塊の世代が定年を迎えるというので、なにかと話題になる。高齢者問題と同じで、社会的負担が増えるといった式の否定的見解が専らである。だが私は、そこに膨大な消費需要が生まれて、沈滞した経済に活気をもたらすだろうという肯定的な貢献の方に大きな期待を寄せる。

下の図3は、博報堂が発表した調査の一部で、団塊世代の支出意欲を示したものである。彼らが一般の勤労者世帯とは異なった分野に、旺盛な消費意欲をもっていることに注目すべきある。

図3. 団塊世代が引退後に入手したいもの



※博報堂エルダービジネス推進室が7月上旬、インターネットで全国の団塊世代の前後層を含む1946-51年生まれの男女計360人に調査(複数回答)

消費行動や生活行動を把握するのに、所得・年齢・職業という陳腐な属性を用いて集団を調査しても、意識や感性などといった情緒的な座標で行動特性を説明してみても、需要の動きや商品開発の手掛かりは得られない。

新しい地平に広がりつつある富裕な生活の実像をとらえるには、それを感知するための斬新な思考回路が必要となる。その提案の一つになればと難解なるへ理屈を陳述した次第である。